びぶりおてか

同志社大学図書館報 №18. 1975. 10. 1

特長のある図書館を

同志社総長
住　谷　悦　治

同志社大学の新しい図書館を見学した方がたはみなその壮大さに驚きと羨望の念をいだいているようであり，そのことを耳にするごとにわたくしは喜びと誇りとを感じている。三木図書館長が，学内の方がたの理解と協力を得て，大学の心臓部と称せられるにふさわしい図書館の内容充実を計っていきたいという念願を述べられているが，館の関係者のご苦心ご努力と学内外のご協力を仰ぎ大学図書館の使命を果すよう期待している。そして学生諸君が図書館というものの利用を修練し自学自習と調査研究に大学生活の充実を心懸けることを希望する。旧図書館は確かに増加した学生たちにとつて狭わい化していた。また学生の試験勉強に利用されすぎていた。試験期が近づくと読書室はすみずみまでいっぱいであった。学生はそのころ図書館の意義を正しく理解しなかったようである。新図書館は大体学生たちが本来の図書館の意義に添うてきているようだということを館員の方から伺って喜んでいる。昔の図書館長荒木良造先生がよくわたくしにラーネッド先生は同志社で最もよく正しく図書館をフルに利用した先生だったと語った。さもありなむと思った。昔ロンドンに滞在していたころ，わたくしの先生でリンデマンという学者はブリッティシミュゼウムを極度に利用していた学殖豊かな先生であった。もちろん外国の図書館には魅力がある。単なる蔵書数の何十万，何百万という数量のみを誇りとしないで，その特長を誇りとしている。大図書館はもちろんであるが，例えばあまり大きくないチューレン大学の図書館は，日本人の羨ましがるほどのラファケディオハーンの文献を有っている。ちよっとした印象をいえば日本の縮緬紙で出来た色彩絵の小さい型の著書など何冊も揃えている。彼は青年時代

にニューオーリンズで新聞記者をしていた関係もあるだろう。

わたくしが同志社大学図書館で誇りとして，来訪者に紹介しているのは，例えば植木枝盛文庫で，これは現図書館員の努力の賜であるが，もう敗戦直後からも田畑忍教授とともに植木の蔵書を一括して整理して欲しいと念願していたことである。それは大体ではあるがその目的を達しえた。喜びはたとえようもない。なおそれが完成した暁には日本政治史，社会史の重要な文庫となるであろうと思う。同志社的といえば中瀬古六郎博士の文庫なども貴いものであろう。

外来の学者たちにわたくしは従来ＣＳ研究会の特長ある蔵書・文庫をよく案内した。ただ六十万，七十万の蔵書数の尨大さ自体は他の大学や都市図書館でも見られることでありさまで誇りとするに足らないからであった。その図書館でなければ見られないような特長ある蔵書を有つ図書館ということは，大学図書館としての一っの重みであり心がくべきところであろう。関西には財力にあかせず尨大な蔵書を有つ図書館があるが，やはり数量の壮大さには，他の遠く及ばぬ立派な文献を有つていることはその当然のこととして調査・研究者にとっては羨望の至りである。それはやはり数はそれなりに特徴ある魅力であるということはいうまでもない。財力には限界があることは悩みであるけれど，その限界情況に直面して賢明な選択と慎重な努力とが望ましい。三木図書館長のいわれるように長期的な視野で努力を続けるほかはあるまいと思う。それにしても現在の同志社大学生にとってはこの大図書館を心ゆくまで利用できるということは幸福であり，その利用の仕方次第で在学四年のじゆうぶんの意義があると思われる。

真の情報センターとしての図書館の実現をめざして

（図書館とコンピュータ）

非常勤講師
（図書館情報学担当）　吉　田　貞　夫

同志社大学図書館にコンピュータが導入されて，記録資料の一大コミュニケーション・センターとしての機能を発揮する日が一日も早からんことを，まず，切望する次第である。日本学術会議の勧告文「大学における図書館の近代化について」の中にも，「……全国センター，地域センター，専門センターの任務を分担すべきである。……」とうたっているように，図書館ネットワークの開発と，機械化を，できるだけ早い機会に強力に促進しなければ，我が国の情報サービス機関の将来は，この方面の先進国に半世紀のおくれをとることは明らかである。そして，この実現は一大学の果しうる経済的能力を遥かに超越している。国家の財政援助の道が開かれる日の到来を期待し，そのための献身的努力を大学人１人１人が積み重ねたいものである。

アメリカの情報網開発計画は，“Title Ⅲ of the Library Service and Construction Act” という条例の規定に基づいて推進されてきたことを，参考にすべきであろう。文献情報網の開発は，１大学や１地方で独自に達成されうるものではない。その実現と成功は，全国的レベルでの協力と援助がなくては望めないであろう。

図書館，すなわち，インフォメーション・センターの共同グループには，学術会議の勧告文に示されているごとく，地域グループと専門グループの２種が考えられよう。そして，大学図書館は，各地域と専門別センターの中心機関として機能しなければならない。とくに，大学図書館は地域・専門の両グループの中で，スイッチング・センター，すなわち，情報交換センターの役割を荷なうことになる。専門グループでは，たとえば，医学，法学，経営学，教育，工学・工業などの専門分野において，それぞれの研究者に文献情報を提供する任務が課せられる。専門分野のグループ構成機関としての情報センターであり，レファレンス・センターとしての機能をもつことになる。最高の教

育と研究の場である大学の図書館は，情報分析センターでもある。一橋大学経済研究所の日本経済統計文献センターにしても，神戸大学経済経営研究所の経営分析文献センターにしても，すべての大学の文献センターが共同グループを構成して，情報資料やデータの相互共同利用をはかるシステムづくりが望まれる。同志社大学でも，法学部と経済学部の研究棟にコンピュータが設置される運びにあると聞く。機械の広汎な利用と同時に研究調査のための資料やデータが広く多くの研究者に開放されることが望ましい。そして，その事実が，情報ネットワークの確立の端緒となるであろう。

大学図書館の自動化は，図書館をしてドキュメンテーション・センターたらしめると同時に，情報分析センターとしての機能を与えるであろう。原始人が医者とよんだ魔法師，ギリシャの古都デルフィの神殿の神託所，中世暗黒時代の修道院，修道院から派生した大学，さらに，コロンブスの大陸発見後急速に進歩した海図の保管所を兼ねた英国水路局など，すべて情報分析機関であったと考えられるであろう。これは人間固有の自然的発展であった。純粋に専門的な学術論文や技術レポートを分析し評価し，さらに，新たな情報やデータを創造する機関が，情報分析センターである。近代的図書館とはかかる使命を帯びた大学の研究の心臓部であり頭脳でなければならない。図書館のあらゆるタイプの記録資料は，人間のマニュアルな手段では処理しえないほど膨大な情報を排出しているのが現状である。大学の研究資料センターにコンピュータはなくてはならない頭脳であることは，いまや常識であるといっても過言ではあるまい。1963年に発表されたワインバーグ報告という副題を添えた「科学と政府と情報」の中に，“センターの活動は，それ自体，科学・技術の本質的部分である。このようなセンターは，単に情報を流通し，検索するのみではなく，新しい情報を創造する。”とうたっている。情報分析センターは，科学と技術に限られるものではなく，社会科学，人文科学，商工業の領域にも拡大されつつある。

さて，図書館にコンピュータが導入された場合，いかなる業務に利用されるであろうか。大別して，次の３種類がある。

(1) 事務機能

(a) 技術処理（テクニカル・プロセス）と，貸出業務を含む事務的機能

(b) ①目録記入　②発注業務　③目録カードの注文　④逐次刊行物のリスト作成　⑤冊子目録の印刷　⑥奉仕内容の分析　⑦統計作成　⑧索引作成

(2) 情報の蓄積と検索

(3) 図書館運営の研究とシステム分析

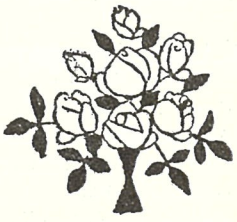
上に列挙した諸業務の内容からも容易に判断されるように，図書館の機械化は，単調な非知的作業から，職員を解放し，人間的な知的作業に専念させることができる。すなわち，図書館員のために，奉仕の新しい領域を開拓することになり，また，図書館行政の円滑化をはかることにもなろう。それにもまして，長期的観点からすれば，図書館運営の経済化を期待してよかろう。

最後に，情報センター，情報分析センターとしての図書館の昇格を希望し，図書館のオートメ化の実現を念願するものである。

図書館　ＢＣＳ賞（建築業協会賞）を受賞

同志社大学広報№84（1975.6.30）ですでに紹介されているが，図書館は1975年第16回ＢＣＳ賞を受賞した。

ＢＣＳ賞は，日本建築協会が国内で竣工した建築物を対象に，種類・規模に関係なく，優良建築作品を選び表彰することにより，建築設計・施工など建築技術の進歩向上を図り建築生産の近代化に寄与しようとするもの。応募作品500件のうち，図書館など16件が選ばれた。審査に際しては，技術開発，創意工夫という観点とともに，作品が地域社会の文化や福祉の向上に寄与しているかなどの点についても配慮がなされている。日刊建設通信（50.6.23）



政治(学)に関する二次文献について

今回は，政治（学）関係の二次文献を紹介します。政治（学）の領域もをなり広範囲におよびますので，ここではなるべく本館所蔵の比較的新しく包括的なもの，あるいは入門参考の手引となるものを選択しました。なお，総合的な文献目録，雑誌記事索引および社会科学関係の二次文献にも政治（学）の分野が取扱われています。本誌既刊号（例；法学に関する文献目録について(1)にも適宜紹介されていますので参照して下さい。

〔1〕 政治学・政治思想・政治史

1. 戦後法学文献総目録　第2集
法律時報編集部編　日本評論新社　昭30　534P.
（㊫028.32；N（Vol.2））
政治学・行政学・政治史，国際政治・外交史の項目（P.367～472）があり，昭和28年までの戦後邦文文献（単行本・論文集所載論文・雑誌掲載論文）を可及的広範囲に収録している。

2. 戦後法学文献総目録　1954年～1966年版　公法編
法律時報編集部編　日本評論社　昭44　2冊　（㊫028.323；N（Vol.1～2）
行政学，政治学の項が上巻（P.342～444）に，国際政治，外交史の項が下巻（P.230～268）に掲載されている。1954年1月～1966年12月刊行の邦文単行書・雑誌論文を採録している。

3. 日本政治学年報　1951年度—
日本政治学会編　岩波書店　昭26—　年刊
（P.310.1；N）
巻末の「学会展望」に，その年度に於ける日本の政治学会の成果として，内容細目別に著書，論文，訳書を紹介し，解題している。その他外国の政治学会の展望などを掲載している巻もある。

4. Publications of Political science in Japan（日本政治学会文献目録）1965—
月本政治学会編　福村出版　昭42—　年刊
（㊫028.311；P）
過去1年間の日本の政治学研究成果を海外に紹介する事を目的として図書，学術誌論文を英訳邦文・併記で収録した年刊書誌。主要論文には英文解題あり。

5. International bibliography of political science Vol. 1—
Prep. by the International Political Science Association in co-operation with the International Committee for Social Documentation, UNESCO. 1954—　Annual（㊫028.31；I）
国際的に採録範囲が広く，単行書，パンフレット・雑誌論文・政府刊行物を1952年発行のものより毎年度紹介した年刊書誌。英・仏文併記している。
Author index. Subject index あり。

6. 政治学事典
平凡社編刊　昭40　1416，80P.（㊫310.3；S2）
各項末に参考文献，人名項目には主著を掲げている。

7. 政治参考文献紹介
＜阿部斉他著『政治』　東大出版会　昭42　P.259～265＞（㊫311.1；A7）
比較的平易な政治学の邦語古典的名著44点を選定して簡単な解題を付している。

8. 政治学研究入門
岩永健吉郎編　東大出版会　昭49　294P.
（㊫311.1；I7）
政治学全般にわたって，7章に分け章毎に概観し，章の終りに基本文献計372点を列記して解題。

9. 日本近代政治学著作年表略
＜蠟山政道著『日本における近代政治学の発達』ぺりかん社　昭43　P.397～426＞（㊫311.21）
明治維新前後から昭和20年太平洋戦争終戦時までの主に政治学関係の邦語著作，重要な訳本を選定。

10. 政治思想史参考文献
＜今井仙一著『政治思想小史』　ミネルヴァ書房　昭47　P.312～324＞（㊫311.23；I2）
政治思想史の入門書としての性格をもった和・欧文献を政治思想史一般と各時代に分け解題している。

11. 大正政治史文献
＜信夫清三郎著『大正政治史』　勁草書房　昭43　巻末P.41～112＞（㊫312.1；S4—3）
原則として日清戦争以後の大正政治史関係和・洋書を収録。雑誌論文は特殊のもののみを収む。

12. 戦後日本政治史文献
＜信夫清三郎著『戦後日本政治史』Ⅳ　勁草書房　昭42　巻末P.59～95＞（㊫312.1；S4（Vol.4））
主として戦後期の日本政治史に関係のある基本的な和・欧文文献を広汎多岐にわたって収録。雑誌論文は特殊なもののみをあげている。

13．アフリカ政治関係文献資料集成
浦野起央編著　アフリカ協会　昭39～40　2冊（㊫028.312；U（Vol.1～2））（全3巻であるが第3巻は未所蔵）
アフリカの政治体制・ナショナリズムに関する英・独・仏・日本の1900年から1963年までの著作，論文，雑誌掲載記事を集大成し，体系的に案内解説。諸国憲法，諸決議・規約・綱領等の資料も邦訳で収録。

〔2〕 議会・選挙・政治集団

14．議会政治文献目録　議会開設七十年記念　国立国会図書館編刊　昭36　444P.（㊥016.4；K—3）
明治元年から昭和35年5月までに出版された議会制度・政党・選挙および議会政治一般に関する内外の文献を網羅的に収録している。巻末に索引あり。

15．憲政史編纂会収集文書目録
国立国会図書館閲覧部政治法制参考室憲政資料室編刊　昭35　224P.（㊫028.32；K）
昭和13年から16年にかけ衆議院の憲政史編纂会が採集した明治期から昭和初期に至る日本憲政史関係の基礎史料を約七百余部，一千余冊採録している。

16．議会政治史参考文献
＜岡本清一　藤馬龍太郎著『年表議会政治史』至誠堂　昭35　P.336～349＞（㊫312.01；N）
議会政治史関係の参考文献。日本の部（165点）と外国の部（105点）に分かれ掲載されている。

17．政党・選挙制度に関する邦文文献目録（1）—（3）
＜国立国会図書館編刊『国立国会図書館月報』104～106号　昭44～45　各巻末＞（㊫P.010.1；K）
1963年～1969年8月の刊行図書および1963年1月～1968年12月発表の雑誌論文を収録。

18．選挙の国際比較参考文献
＜西平重喜著『選挙の国際比較』　日本評論社　昭44　P.291～303＞（㊫314.8；N）
西欧諸国および日本の選挙についての内外書籍論文を収録。欧文文献が多数を占める。

19．右翼事典
社会問題研究会編　双葉社　昭45　492P.（㊫315.1；U）
巻末の右翼運動史文献一覧にて参考文献60点を紹介している。なお，この事典の内容は解説篇，団体篇，資料篇に大別され，資料篇には人名録と右翼・民族派運動年表を掲載している。

〔3〕 行政・地方自治

20．地方自治参考文献
＜第一法規出版編刊『新地方自治講座』　昭48　11冊　各巻末＞（㊫318；S2（Vol.1—11））
各巻の内容主題（例　第1巻　地方自治制度，第2巻　議会）に関する参考文献を解題している。

21．都市・自治学参考文献目録
＜東京市政調査会編刊『都市自治学説史概説』昭47　P.239～329＞（㊫318.7；T10）
都市・自治学関係の邦語文献を分類・整理。文献採録は東京市政調査会市政専門図書館並びに国会図書館収蔵の明治以降刊行図書に限る。雑誌論文および特定地域の事例研究は割愛されている。

22．都市計画文献目録
日本都市計画学会編刊　昭44　286P.（㊫028.318；N2）
明治末期以降1969年現在までの国内主要都市計画関係資料文献約6500を収む。

23．都市研究文献目録　第1号～
東京都立大学都市研究組織委員会編刊　昭44～（㊫028.318；T（Vol.1～））（第2号のみ未所蔵）
第1号「活性汚泥の微生物学的ならびに生化学的研究に関する文献目録」，第3号「都市史・都市計画史研究文献目録（外国篇）」，第4号「都市史・都市計画史研究文献目録（日本篇）」，第5号「献目都市研究関係文献目録」，第6号「都市研究関係文献目録　昭和46年版」，第7号「都市の物質循環の問題に関連した資料および文献目録」，第8号「都市研究関係文献目録　昭和48年版」以後続刊の予定。各号それぞれ都市論一般をはじめとして都市政治行政，その他都市問題に関して各項目別に戦前の和文文献を含めて多数採録している。一部欧文文献も含む。第5，6，8号の巻末には著者名索引・書名索引等が付されている。

24．都市問題参考文献
＜磯村英一　黒沼稔著『都市問題概説』　鹿島研究所出版会　昭42　P.148～168＞（㊫318.7；I—4）
都市参考書の文献解題，文献リストおよび内外の都市研究誌を収む。

25．外国警察関係邦文文献目録（1）—（2）
＜国立国会図書館編刊『国立国会図書館月報』68，69号　昭41　各巻末＞（㊫P010.1；K）
戦後から1965年12月までに刊行された図書・パンフレット・雑誌論文。但し，図書・パンフレットは国会図書館所蔵のもののみ収録。

〔4〕 国際政治

26．国際政治学の主要文献
＜浦野起央著『現代国際政治の課題』　有信堂　昭45　P.325～348＞（㊫319.1；U）
内外の国際政治学に関する主要文献を広汎に紹介・解題。次頁より別掲で「アジア・アフリカ研究入門」の解題があり，又「ラテン・アメリカ文献」の付録もある。

27．国際問題文献資料月報　初瀬竜平　「国際問題」編集部編
＜日本国際問題研究所編刊『国際問題』85号～昭42～　月刊　各巻末＞（㊫P319；K）
国際問題関係の邦文単行書，新聞・雑誌・学術誌掲載論文を内容細目別に毎月紹介した月報である。

28．国際法・国際私法・国際政治・外交史主要文献目録
＜国際法学会編刊『国際法外交雑誌』61巻　1・2合併号～　昭37～　おおむね各巻に掲載＞
（P329；K）
毎年度の主要邦語文献および日本人の著わした欧文文献を収録。本館には昭和36年度文献目録より所蔵（但し，昭和40，41年度文献目録は欠）。

29．日本外交史関係文献目録
英修道編　慶応通信　昭36　485P.（㊞016.449；H）
外交史のほかに政治・経済・社会の分野で外交に直接関係あるものも含む。邦文・欧文・中国文の図書，邦文雑誌からの論文類など多数網羅的に収録。

30．日米安全保障条約に関する邦文文献目録
＜国立国会図書館編刊『国立国会図書館月報』67号　昭41　P.22～27＞（㊫P010.1；K）
1959年～1966年刊行の図書および1961年1月～1966年6月刊行雑誌論文を収録。

31．反安保の運動と思想にかんする基本文献
＜小山弘健著『反安保の論理と行動』　有信堂　昭44　P.251～274＞（㊫319.8；K7）
70年安保を中心にして反対ないし批判的な立場から書かれた主要単行本を解題している。

32．わが国の安全保障問題をめぐる文献・雑誌論文
＜田中直吉著『核時代の日本の安全保障』　鹿島研究所出版会　昭41　巻末27P.＞（㊫319.8；T―2）
日本の安全保障および戦争と平和に関する1950年～1966年刊行の邦語文献・雑誌論文を収録。

33．沖縄関係（政治・経済・教育）邦文文献目録（1）―（2）
＜国立国会図書館編刊『国立国会図書館月報』　78，79号　昭42　各巻末＞（㊫P010.1；K）
1967年8月末までの刊行資料文献を収録。

34．沖縄関係邦文文献目録（1）―（2）
＜国立国会図書館編刊『国立国会図書館月報』102，103号　昭44　各巻末＞（㊫P010.1；K）
1967年9月以降1969年4月末まで刊行の主として沖縄の政治・経済関係の文献。

当館所蔵沖縄関係邦文文献目録（3）―(21)
＜国立国会図書館編刊『国立国会図書館月報』127～134，140～148，154，157，161号　昭46～49各巻末＞（㊫P010.1；K）
1969年以降1972年までに刊行された国会図書館所蔵の沖縄関係の図書および雑誌記事を収録。

35．アメリカの沖縄統治参考資料
＜宮里政玄著『アメリカの沖縄統治』　岩波書店　昭41　P.289～312＞（㊫319.253；M3）
英文関係と邦文関係に分け，単行本，パンフレット，定期刊行物記事・論文，新聞を多数収録。

36．日露領土問題参考文献
＜Berton，Peter A．著『日露領土問題』鹿島研究所出版会　昭42　P.133～142＞（㊫319.21；B）
1850～75年の日露北方領土問題に関係する参考文献。日本資料37点，露文資料29点，英仏独文献42点。

37．北方領土の地位文献目録　広瀬善男　内田久司編
＜国際法学会編刊『国際法外交雑誌』60巻　4・5・6合併号　昭37　P．525～584＞（法学部に所蔵，図書館になし）
日本文献，外国文献，ロシア文献に大別し，北方領土問題関係文献を多数収録。なお，日ソ関係年表（1853年～1961年末）（P.478～524）も別掲されている。

38．日韓条約関係邦文文献目録（1）―（2）
＜国立国会図書館編刊『国立国会図書館月報』　55，56号　昭40　各巻末＞（㊫010.1；K）
採録は原則として1964年1月から1965年10月上旬に刊行された図書，パンフレット・雑誌論文に限定。

39．日中関係重要資料一覧表
＜石川忠雄他編『戦後資料・日中関係』　日本評論社　昭45　P.465～488＞（㊫319.21；I5）
1949年から1970年4月までの日中間の声明・論説，条約，取り極め等に関する重要資料リストである。

40．台湾国際政治史文献目録・欧文参考文献
＜戴天昭著『台湾国際政治史研究』　法政大学出版局　昭46　P.600～626，巻末P.17～30＞
（㊫319.222；T2）
台湾国際政治史或いは台湾問題に関する内外の文献を多数収録している。

41．中ソ論争に関する邦文文献目録（1）―（3）
＜国立国会図書館編刊『国立国会図書館月報』　59，60，62号　昭41　各巻末＞（㊫P010.1：K）
図書は資料集・著作・パンフレットおよび図書掲載論文に分け，論文は1962年10月以前，62年11月～63年12月，64年1月～65年12月の3区分にして収録。

42．ベトナム問題文献
＜浦野起央著『ベトナム問題の解剖』，『続ベトナム問題の解剖』　外交時報社　昭42～45　2冊　P.557～573，続巻P.655～664＞
（㊫319.223；U（Vol.1～2））
ベトナム問題についての和欧文献を紹介・解題。

43．国立国会図書館所蔵国際連盟・国際連合刊行資料目録
国立国会図書館参考書誌部編刊　昭46～49　3冊
（㊫027.2；K4A（Vol.1～3））
国会図書館が豊富に所蔵する国際連盟および国際連合の刊行物を収録。両機関の機構，資料の種類についての概説や主要資料の簡単な解説もある。巻末に資料件名索引，著者名・書名・主題索引等あり。

「植木文庫目録」の刊行について

土佐の自由民権論者として有名な植木枝盛の旧蔵書が彼の死後明治26年同志社に寄贈された。この植木文庫は「びぶりおてか」2号に―特殊文庫その(2)」として紹介されている。

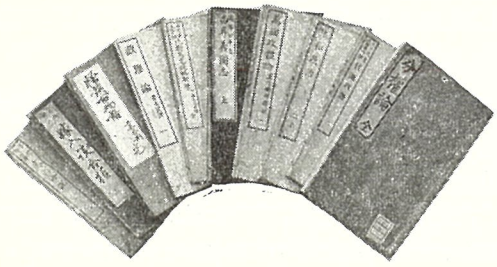
寄贈当時は現在の有終館2階の図書室に別置されていたが，大正4年に旧図書館（現啓明館）が完成して植木文庫もそちらに移された。然しいつしか一般図書の中に混配排架されたので，其後植木文庫の図書をすべて手にとって研究した人は殆んどまれであった。一昨年新図書館が建設されて，植木文庫を別置出来るスペースが生れたので，再び一ケ所に集める事になった。同時に同志社創立100年を記念して「植木文庫目録」を刊行することになった。幸いに植木文庫開設当時の図書目録が書庫の隅から発見されたので現物と目録を対照することが出来た。植木文庫は明治26年6月に806冊で発足し翌27年7冊追加されて813冊になった。現存冊数は679冊で134冊が所在不明である。そのなかに「植木枝盛略伝」及び「立志社始末」という表題の植木枝盛自筆草稿と思はれるもの2冊と，植木の著作「言論自由論」及び「土陽雑誌外2種」が含まれていて現在見られないのは非常に残念である。片岡健吉日記によると「植木枝盛略伝」は明治27年7月高知に渡り，同志社に帰ることなく昭和20年高知で戦災に会い焼失した。

植木文庫の内容をみると社会科学・政治・法律関係の図書が360冊で約半分を占めている。

ついで哲学関係に歴史・地理関係の図書が多い。各部門にわたって明治初期の図書が多くある。これらの図書は当時では普通の図書であったかも知れないが，現在では入手し難い図書が多い。植木文庫に，外国書は一冊も含まれていない。枝盛はそのかはり多くの翻訳書から海外の知識を得た。植木枝盛は自伝及び日記を書き残しているので植木文庫の図書の多くがその購入時期及び閲読時期を知ることが出来る。

冊子目録作成のため一冊一冊調査の結果，植木枝盛が丹念に読み，書込や傍点，傍線のある図書が多く発見された。植木枝盛自筆の写本も3冊みつかった。又高知に於ける政談演説会の入場券も二枚図書の中から出てきた。植木枝盛が編集を担当し，枝盛の論文も掲載された雑誌「愛国志林」10冊及び「愛国新誌」20冊を合本製本した豪華な図書がある。背に金文字で植木蔵書と刻印され，巻頭の白紙六頁に「経国之大業不朽之盛事」と筆で書入れがしてある。

今回刊行される「植木文庫目録」の内容は大略次の通りである。巻頭十頁余りは写真で文庫の内容を紹介し，本文は二段組で，主題別に項目をたて，書名のＡＢＣ順に配列し，本文の後に明治26年植木文庫開設当時の図書目録を再録した。又家永三郎氏の「植木文庫とその目録刊行の意義」及び外崎光広氏の「植木枝盛と同志社」を掲載し，巻末はＡＢＣ順に配列した書名索引を附した。頁数は65頁余り，大きさはＢ5版，印刷部数は500部で10月末刊行の予定である。



この「植木文庫目録」が植木枝盛の研究は勿論，明治憲政史の研究や民権運動の研究にいささかでも貢献するならば誠に幸いである。

図書館から

最近の収書から，開架閲覧室，ＡＶ準備室
私大図書館協会総大会

最近の収書から

今年の出版傾向として個人全集や稀覯本の発行が相ついだが，個人全集では従来の文学者中心から各学問分野の代表的学者の著作集が発行されたのが特色である。（都留重人著作集・鶴見俊輔著作集）。稀覯本では岩波から出たレオナルド・ダ・ヴインチの「マドリッド手稿」と「知られざるレオナルド」が出色である。他には，近衛家伝来の陽明文庫を集めた「陽明叢書」，和名類聚抄等を集めた「古辞書叢刊」，最も権威ある定本としてで洋皮紙装幀の「The collected works of Sir Winston Churchill」があげられる。

これらの中から最近，特に興味をひかれたものを若干照会してみる。

(1) 贈位諸賢伝　増補版　上・下

没後に生前の功労によって位階を贈る制度すなわち贈位の制度が戦前にはあった。この増位者を明治元年から昭和2年に至る2,168人の略伝を集めたものに新たに昭和3年から19年に至る204人を加えたものが，今回の増補版である。特殊な人名辞典ではあるが，明治維新の功臣が多く含まれており，幕末・維新の研究には欠かせない書といえる。記述も簡潔で読みやすく要点を得ている。

(2) 日本暦日原典　内田正男編著

日本の古典文学や日本史を研究する人にとって干支で表わされた日付や昔の日付を太陽暦に換算したい時に非常に便利な書である。明治にでた「三正綜覧」が不完全であっただけに，記録に遺る諸法定暦書の計算法に基き，電子計算機を駆使して，わが国の旧暦時代の全暦日を再現させたのは画期的な仕事といえる。

(3) ジャパン・パンチ　復刻版　1862―1887

昨今の漫画ブームの中で日本の漫画雑誌がどのように始まったかを知っておくのも有益である。幕末に英国の絵入週刊紙の特派員として来日したチャールズ・ワーグマンが26年間にわたって書いた日本通信をまとめたものがこの書である。諷刺画のおもしろさだけでなく，明治の文化・風俗を知る上でも貴重な資料となっている。

開架閲覧室の運営について

前号に新館移転後の利用状況を紹介しましたが，その中で毎日の図書利用の中心は開架閲覧室にあることがわかります。

この閲覧室には，現在，約4万5千冊の図書が配架され，図書館利用案内にも書かれているように日常の勉学に非常に関連が深い図書を中心に選択され，配架されるようになっています。従って図書館が購入受入する図書資料の8割近くがこの閲覧室に配架されている事になります。しかし，収容冊数は約5万冊ですので，毎年受入れられたものをそのままにしておくと図書が溢れることになります。そこで適当な時期に，よく利用される図書とそうでない図書とを区別して，利用の多い分野には複本，関連図書の購入等を，利用されない図書は書庫に納める作業を行ないます。これを〝ウイーデイング〟と呼んでいます。

このウイーデイング作業の基礎になるものは，毎日の利用状況をあらわした閲覧利用統計です。この統計は，利用される図書を百区分（ＮＤＣ，日本十進分類表に従う）に分けて，例えば法律，日本史，教育等がどのぐらい利用されるか数字で把握できます。こうした統計の数年間の資料をもとにして各分野ごとの書架の割り振りがなされています。

これに，同じく百区分した開架の蔵書冊数を関連させてみると，どの分野の図書が回転率が高いかがわかり，それによって図書を選択，購入する際や，ウイーデイングするときの貴重な資料として生かされています。

勿論，こうしたことだけでなく，希望図書購入の制度，教員の推薦図書制度，雑誌聞の書評等によってきめの細かい配慮がなされ，開架閲覧室の運営がなされています。

（P.11下段へ続く）

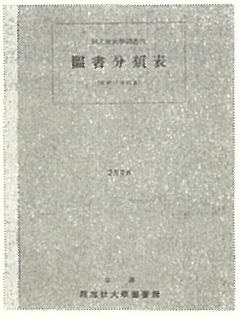
同志社大学図書館の歴史（その10）

1930年代と図書館近代化

1930年代，すなわち昭和一桁の後半から二桁にかかる時期の，あの不幸な大戦前夜の暗い時代ではあったが，同志社としては1935（昭和10）年，創立60周年を迎えた発展の時期でもあった。1930（昭和５）年には大学の学生定員の増加が認可されたし，女学校専門学部が同志社女子専門学校に，専門学校高等商業部が同志社高等商業学校にそれぞれ独立したし，建物の新築にも栄光館，新島会館，アーモスト館などの竣工を見ることともなって，充実・整備が着々として進められていたのである。

図書館についても，旧大学令による同志社大学の発足（1920年）以来，その蔵書が急増したことは前号でも述べたが，この傾向は1930年代に入っても定着し，1929（昭和４）年61,000冊の蔵書は1935（昭和10）年には71,000冊を数え，そのペースは，それ以前のペースに比べて増しこそすれ減ることはなかったのであった。これら増加図書のなかには創立60周年の時期に集中して，1933（昭和８）年から1935（昭和10）年の間に寄贈された特殊文庫の多くが含まれている。それらの特殊文庫はすべて校友（卒業生）の寄贈によるものであって，吉田文庫，岡田文庫，安東偉人文庫，原田文庫，横田文庫，村上文庫，加藤文庫がそれであり，なかでも安東偉人文庫は安東長義氏の意志によって，伝記書を蒐集購入して学生生徒の利用に供したもので，主として1934（昭和９）年設置の時期より戦前までの，わが国で出版された伝記書の多くを集めた特殊集書として特徴あり，また当時の学生生徒に裨益したものということができよう。また原田文庫は第七代（1907〜1919）社長（総長）の旧蔵書を厚意によって寄贈されたもので，キリスト教関係の図書を主とし，明治・大正期のキリスト教関係の雑誌が多く含まれていて，その方面の研究に欠せないものとなっている。

しかし，これらの急増は反面，未整理図書の累積を来たし，書庫の１〜２階がこれらで埋めつくされるほどともなり，整理を完了して目録から検索可能な図書は1935（昭和10）年には約20,000冊に過ぎず，あとの約50,000冊は目録からの検索不能な，すなわち一般の利用者には利用できない書庫に寝ったものとなっていたのである。このような状態を改め全蔵書を完全に整理することが急務となり，また，より近代的な分類法の採用と目録法の適用が指向されて，1910年代から用いられて来た『同志社図書館蔵書分類』（前号参照）から脱皮し，『同志社大学図書館分類表』の編集が進められ，熱心な館員の献身的な努力によって1938（昭和13）年に完成，これによって全蔵書の分類を更めて進めることとなった。現在旧分類といわれるものが，これによったものである。これと同時に目録についても全面的に改める計画が構想されて，並行して進められ，1939（昭和14）年には図書館整備５カ年計画の初年度として数名の館員を臨時に増員して，その実行に着手したのである。しかし，この計画の最高責任者であった湯浅八郎総長の退陣もあり，さらにはわが国の軍国主義化，そして戦争へののめり込みは大きな障害となり，この計画は戦後へまで引き継がれねばならなくなるのである。



同志社大学図書館図書分類表（初版）
（現・旧分類表）

上述の計画と並行して構想されたものに，同志社全学園の図書管理の統一である。これまで各学校，各学部で個々に収集・管理・運用してきた蔵書を可能な限り集中して全学の図書管理を合理化して，図書館をして真に中央図書館の機能を持たせようとするものであった。この構想の実施も容易ではなく，これもまた戦後へと引き継がれる結果となった。

一方，図書館の図書利用については本館においての，その初期から学生生徒に貸出しを実施していて，当時の多くの図書館の図書利用が閲覧を中心としていたのに比べて先進的であったということができよう。また私学の図書館として，その教職員・学生生徒以外にも利用の途を開いていたのも伝統であって，これは1939（昭和14）年に『同志社大学図書館図書特別貸出内規』として制度化されたが，閲覧のみならず貸出しをも許していたことは注目されるべきであらう。

実例を中心とした
資料のさがしかた　—8—
——「判例」の調査——

今回は「判例」を調べる場合に，学生諸君がせめてこれ位のことは知っていて欲しいと思われることを中心に，質問例を挙げて資料の探し方を紹介しましょう。

Ⅰ　著名事件の判例を調べるとき

【質問例1】 二・二六事件の判決文がみたいのですが，ありますか。

＜回答＞

「二・二六事件判決原本」（新393.3；T）をみてください。

＜解説＞

「戦後法学文献目録・公法篇1」（新028.323；N）をみますと，東潮社現代史料室編の上記文献が出版されていることが分ります。また「二・二六事件秘録・別巻」（新210.73；N）の「二・二六事件関係文献目録」をみますと，1964年に「日本の謎」として発行され，その後「二・二六事件判決原本」として再刊されていることが分ります。これを書名目録で調べればよいわけですが，この場合，二・二六のローマ・ナイズの切り方に注意して下さい。戦前または戦後の主要な事件の判決文は現代史の資料として収録される可能性が高いので現代史の史料なども注意して下さい。

【質問例2】 1932（昭和7）年の五・一五事件に関する判決文がありますか。

＜回答＞

「日本政治裁判史録・昭和篇」（新327.609；N）が最適かと思います。

＜解説＞

「新分類相関索引」の判例・判例集の項をみますと判例・判例集320.98，刑事判例集326.098，国際判例集329.098，民事判例集324.098，商事判例集325.098，労働判例集328.6，特許判例集328.2となっています。しかしこの図書のように刑事事件を中心とした訴訟記録と判決文が包含されたものは327.609に分類されますので注意してください。また質問例1の二・二六事件判決文も軍法会議の判決ということで393.3の個所に分類されています。本書は目録カードで検索できたとしても，全五巻の内容は明治前期，後期，大正，昭和前期，後期との記述があるだけで，その詳しい内容は解らないと思います。このような時には係員に相談して下さい。「全集総合目録」や「全集・叢書カタログ」のファイルなどで知ることができます。ちなみに上記判決文の典拠は次の図書です。

法律新聞　3601号（陸軍）　（P320.1；H11）
法律新聞　3621号（海軍）　（P320.1；H11）　} 1933年 No.9-12
法律新聞　3656号（民間一審）（P320.1；H11）　1934年 No.1-4

「大審院刑事判例集」第14巻（新326.098；D2）の民間大審院判決は省略されています。

【質問例3】 昭和38年5月1日に起った狭山事件（善枝さん殺し）の判決内容を知りたい。

＜回答＞

第一審判決は「判例時報369号」（P320.1；H3）に，控訴審判決は「判例時報756号」にあります。

＜解説＞

「判例時報」の索引には「著名事件索引」があり，戦後の主な判例は，ほぼこれにより探すことができます。但し，この索引は591号以後に作成されたもので，当館所蔵の索引では「昭和46年7月15日号臨時増刊No.632」と「最近号」の索引とがあります。索引は最近号から調べて下さい。この事件のように，目下係属中のものは「No.632総索引」には第一審判決だけですが「740—758号総索引」には控訴審判決まで記載されています。尚，控訴審判決は「高等裁判所刑事判例集第27巻5号」にも記載されています。

Ⅱ　引用判例（文献）を調べるとき

【質問例4】

(イ)　大審院判例集をみたいのですが，（大判大正五年一二月二五日録二二輯二五〇九頁）としか書いてありません。質権設定と代理占有の個所です。

(ロ)　「大判（刑事連合部）昭和一一年五月二八日刑集一五巻七一五頁」の判例を見たい。

＜回答＞

(イ)　「大審院民事判決録　第8巻第22輯～23輯」（新324.098；D）を見て下さい。

(ロ)　「大審院刑事判例集　第15巻上」（新326.098；D2）を見て下さい。

＜解説＞

上記のような質問例は，引用文献の巻頭または巻末などにある「凡例」「略号」「文献略語」などを注意していないことや，法学文献を読み慣れていない人に多いものです。一般に引用判例は「①判例の表示＋②その年月日＋③

判例集の略語」を続けて記載されるのが普通です。次に具体例を挙げてみます。

①判例の表示の例は次のようなものです。判決は「判」と略し，決定は「決」などと略して，次のように表示されるのが多いようです。

大判（連合部）……大審院連合部判決
大決……大審院決定
最判……最高裁判所判決
東京控判……東京控訴院判決
東京高判……東京高等裁判所判決
東京地判……東京地方裁判所判決

②このあとに判決または決定などの年月日が入ります。

③判例集は出版数も多く，著作者が適当に省略するため多岐にわたりますが，比較的引用ケースが多いと思われる判例集は次のようなものでしょう。

民録……大審院民事判決録
民集……最高裁判所（大審院）民事判例集
高裁民集（高民集）……高等裁判所民事判例集
下級民集（下民集）……下級裁判所民事裁判例集
刑録……大審院刑事判決録
刑集……最高裁判所大審院刑事判例集
高裁刑集（高刑集）……高等裁判所刑事判例集
下級刑集（下刑集）……下級裁判所刑事裁判例集

以上のような略語とともに，引用文献が刑事か民事かが明白な場合には「録」または「集」と略されることもあります。「集」と「録」と略されていても，一般に次の判例集のいずれかに該当するものと考えられます。いずれであるかは判例の表示により判断すればよいわけです。

「録」
- 大審院民事判決録（新324.098;D）
- 大審院刑事判決録（新326.098;D）

「集」
- 大審院民事判例集（新324.098;D2）
- 大審院刑事判例集（新326.098;D2）
- 最高裁判所（民事/刑事）判例集（新320.981;S3）
- 高等裁判所（民事/刑事）判例集（新320.981;K2）

具体的事例では，以上の判例集以外に様々なものが引用されています。ことに下級審の判例では公刊のもの以外に古い文献や専門雑誌などが引用されるケースが多くなります。

AV準備室から

AV資料の収集について

AV資料の収集については，運営上多角的広範囲な視聴覚資料の収集が望ましいと考えられます。しかし特にレコード音楽は，当面現況を考慮して，教養を高め，学生生活に潤いをもたせ，読書の緊張を柔らげるものとしてクラシック音楽にしぼりました。そのうちでも特に歴史的，芸術性評価の高いものを対象として，収集を計って参りました。

更にまた，ポピュラー音楽愛好者の要望にこたえ，ジャズ，シャンソン，カンツオーネ，ラテン等の洋楽，ならびに邦楽等のうち，歴史的に希少価値のあるものを対象に収集を行ない，広範囲な学生の利用を期すことになりました。

今後適宜にアンケート調査も行ない利用学生の希望等も考慮に入れ，収集内容の充実を計って行きたいと思います。

私立大学図書館協会昭和50年度（第36回）総大会研究会開催される　7/24〜26

私立大学図書館関係者による

本学を会場として，標記の会が行われ，全国から130校，300人の図書館関係者が集まり盛大に開催された。初日は，総会が行われ，午後には本学文学部教授オーチス・ケーリ氏の「図書館あっち（アメリカ）こっち（日本）」と題する講演，2日目は「外国雑誌購読業務と問題点」と題する大阪工業大学図書館北克一氏はじめ3名の研究発表が行われ，午後からは，皇学館大学教授野間光辰氏による「一つの疑問―板本の刊記について」の講演，最終日は，古文書等の見学研修が行われた。

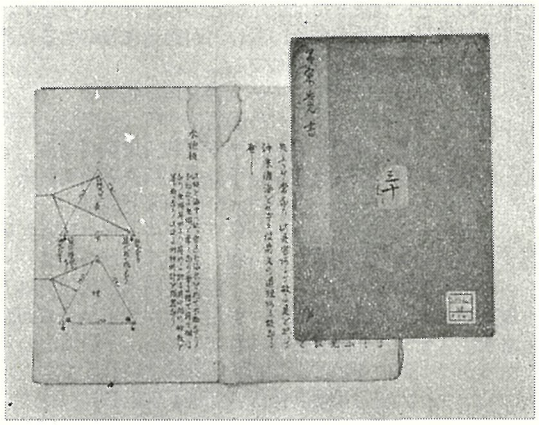
また，本館地階展示場では10月末刷子目録を刊行する「植木枝盛文庫展」を行った。初日，会場の神学館が冷房不能となり，翌日から会場を図書館1階の図書雑誌参考室に変更するハプニングもあったが，学内外の皆様のご協力ご援助を得て，会場校としての責務を果たし得たことを紙上をかりお礼申し上げます。

ピックアップ

呂　宋　覚　書　（立原翠軒自筆写本）

沖縄海洋博不況というので，テレビにＰＲ作戦をかけて賑う時。海洋にちなんで，わが国が南洋雄飛時代を語る資料「呂宋覚書」を紹介します。

この資料は，かって呂宋に航海した川淵久左衛門が，思い出を綴るもの（寛文11年辛亥歳８月18日）を，立原翠軒が写したものです。



内容は，長崎から当時呂宋へ航海する航路・地理・風俗・習慣はもとより，海航の技術に及び，更には唐船の船役までを詳細に記録するものです。特に注目に価するものに「……価するものに此堀は松倉殿責らるるとて用心にほるなり，寛永６年の事也。明る７年に渡り，其通らちたまはり候，竹中采女殿よりマネイラへ豊後守殿より責らるる由，さきへ告られ申候由，マネイラに居申候日本人申聞せ候。」とある記事です。

呂宋には慶長19年（1614）に，幕府はキリスト教徒高山右近・元丹後領主内藤飛驒守徳庵など，夫人家族を共に148人を長崎からマニラ・マカオに追放した歴史があります。彼ら一向は途中暴風に逢って，海上を１ケ月もかかりマニラに到着したが，そのときフィリピン諸島長官ドン・フワン・デ・シルバ（Don Jean de Silves）自ら出迎え，特に右近については，キリスト教布教に運命をかけた偉業と，迫害に同情し，年金を与へる程でありました。然し右近は到着後40日を経て劇列な熱病に冒され（元和元年２月５日）キリストの名を唱えつつ瞑目しています。

松倉殿とあるのは，肥後島原の城主松倉豊後守重政のことで，彼はキリスト教徒を国外に追放したことにより安心出来ないというので，当時「伴天蓮の根拠地呂宋」攻略を計画し，藩士吉岡九左衛門，木村権之丞両人に呂宋偵察を命じます。寛永７年11月11日に両人は20人を卒つれて出発し，翌年６月に皈朝しましたが，呂宋では，日本人に逢うときは，必ず４，５名宛附添がつけられたので，豊後守の書状すら封を切ることが出来なかったということです。豊後守は寛永７年11月16日に急死して，呂宋遠征行動は不発に終ったが，呂宋では，マネイラに星形城を築き，城の石垣は切石にして，高さ１丈４～５尺以上に築き，海に，川に，更に陸つづきには堀をほるなど松倉遠征に対応していたことが伺われる。竹中采女殿とあるのは，当時長崎奉行をして，偽造パスポートを発行し，後に訴へられて失脚した人物であるが，彼は松倉遠征を先に告げる秘話を語るもので，この覚書は貴重な資料であります。

この写本は，昭和３年11月発刊の「海表叢書」巻六（081：K3）に掲載の原本であります。この叢書は読み易く，解説もあるが，高山右近のことも見え，とあるが松倉殿云々から右近ら追放の事件が頭に浮び，右近の名を記したのか？　写本には高山右近の名は見当らない。呂宋における日本人のキリスト教徒は，叮重な加護のもとに日々を送っていたことは明らかな資料である。川淵久左衛門については詳細を知ることは出来ないが，この内容から，唐船について詳細な知識をもつ乗組員の１人でありましよう。当時オランダ軍は唐船を使用するに当り，日本人を雇用した記録もあるので調べたが，オランダ商館長の日記には，「久左」の名はあるが久左衛門の名は見られません。

立原翠軒は水戸藩の儒者で史館に奉職，後に総裁に任ぜられて大日本史上梓の底本を作った人物です。彼はそのため諸国を巡覧して史料を集め，自ら写した「呂宋覚書」の他，「上哀日録」二点等々本学小室沢辺文庫（びぶりおてか創刊号参照）の中に含まれています。

本館ではこのような貴重資料を逐次マイクロフィルムに収めて，利用者の便宜を計るようにしています。

あ　と　が　き　“びぶりおてか” No. 18をお届けします。

○ 住谷総長と吉田先生には，期せずして，本館が懸案としている点についてご指摘をいただきました。

○ ６月17日，本学卒業の山田俊三氏より，経済学関係の図書を中心に約300冊のご寄贈をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

○ 読書の秋，学生諸君は図書館をフルに活用して下さい。

“びぶりおてか”　同志社大学図書館報　No. 18　1975年10月１日　発行

発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 211－2311

編集責任者　楠見愃伸（図書館庶務課長）　印刷　芳文堂印刷所